になる河内や大阪からいち早く天理教が伸び広がっている事を考えると、神名流しはその理の伏せこみになったわけであります。

続いては、母屋のとりこぼちであります。善兵衛様が出直しこかん様が布教に出た年、今度は中山家の母屋を買い取る人が見つかります。中山家は財産・持ち物・高塀・母屋など、全てを親神様の思いのまま全て取り払い、いよいよ人間の屋敷から神の屋敷へと建て替えるための準備にかかられたのですが、このひながたの場合は、まさに今住んでいる所を次に新築の予定の無いまま壊してしまわれたのです。それどころか教祖は、これから世界のふしんにかかる。祝うて下され、と言われ、解体に来た人達に酒と肴を振る舞われました。このひながたから学べることは、教会の普請など何か形の普請をするのがプラスとするならば、解体はマイナスの普請になります。しかし、このマイナスの普請が大きければ大きいほど、大きく御守護を頂けると悟れるのです。このマイナスの普請とはいわゆる心の普請であります。歴代真柱様を初め先人・先輩先生より聞かせて頂く、形の普請に勝る心の普請とはこのことを仰せられているのです。そして、この5年後に、天理教が始まってから初めてのつとめ場所の普請が始まるのです。この普請から始まり現在のおぢばは、先人・先輩先生の心の普請のおかげで神殿を初め、教祖殿やあちこちに建つ館、またおぢばに行って寝泊りする詰所、今住まわせて頂いている大教会など、初代の先生達の時代では想像出来ない程のありがたい姿を見させて頂いております。

さらに、次の年には中山家にあった90坪あまりの田地を全て質に入れてしまいました。これで庄屋まで勤めた中山家の財産はついにお屋敷の土地建物以外いったん全て無くなった訳であります。教祖は親神様の仰せのまま、約15年をかけて貧のどん底へと向かって行かれました。次は与えを喜ぶであります。天理教が始まってからの15年は先ほど話した内容ですが、これから先の15年から20年・25年の間は、まさに貧のどん底といえる容易ならぬ日々を教祖はお子様を含め、共に通られました。そのひながたの中でも、明日食べるお米がなくなり、こかん様が教祖に「お母さん、もうお米はありません」というほどの状況の中、教祖は「世界には、枕もとに食物を山ほど積んでも、食べるに食べられず、水も喉を越さんというて、苦しんでいる人もある。そのことを思えば、わしらは結構や、水を飲めば水の味がする。親神様が結構にお与え下されてある」などのひながたや、また、「どれくらいつまらんとてもつまらんと言うな、乞食はささぬ」と、子供たちを励まされ、子供たちも品のどん底で崩れ落ちそうな心を奮い立たせ、教祖に付いていったのでした。

このような中、貧に落ちきる道を20数年間に渡ってお通り下された後、をびや許しがきっかけとなり、目の見えない人がパッと目が開く。気の狂った人もスパッと正気になるといったことが起こり、教祖に助けを求めてお屋敷へやってくる人たちが次々と訪れるようになったわけであります。どんな困難な状況でも、絶えず親神様の御守護を探し、そのことに気付き、今喜べることは何かを見つけ、心勇んで通らせて頂くことを教えて下さっています。そして、教祖はなぜ真っ先に貧に落ちきられたのか。それは、欲の心をまず忘れるということであります。我々は貧乏になることが目的ではないのです。欲の心を捨てることによって、親神様の思いにふさわしい心になるということが目的なのです。この親神様の思し召しの一番の妨げになるのは欲の心であります。そして欲を捨て去る一番の近道として、先人先生たちは御供、お尽くしをさせてもらおうと説いて回られたのです。貧に落ちきる姿は、自分の持ち物を手放してしまう姿であり、それはそれまでの暮らし方が変わることで、暮らし方に対する自分の考え方を変えることを意味します。我々が御恩報じというにをいがけ、おたすけ、また、欲を捨てるのには一番近道になる、御供、いわゆるお尽くしに努めさせて頂く上で、最も大切なことは自分の考え方や暮らし方を親神様の思いに合わせるということです。教祖は心を空にして尊い親神様の思いを聞き入れる努力をするということを、貧に落ちきるというひながたをもって我々に教えて下さったのです。

四代・徳三郎会長は、理を立てるから身が立つ、理を軽くすれば身が立たなくなるといつもお話下さっておりました。理とは、親神様の思召。いわゆる思いであります。理がなければどれだけ頑張ろうとも、一時いいようになるだけで続くものではありません。本日、大教会を通して、大祭の理を頂戴したように、おつとめの理をはじめ、理というのは自ら親神様の懐に入るのと同じように、自らが取りに行かなければなりません。いよいよ来年に迫ってきました、大教会創立110周年に向け、まずはひながたを中心に生活する日々を心がけ、親の理、ぢばの理をしっかりと立てて通らせて頂き、一つでも多くの理を頂戴し、110周年の三年千日がいよいよ折り返しの時期になる中、本年の心定め完遂が今の旬の理作りになるということを心に置き、立教183年も親神様、教祖へご恩返しにつとめられますよう。勇んで共々に通らせていただきたいと思わせて頂きます。

※全文はホームページにて掲載致します。